

---

 学 会 記 事
 

---

## 第 4 回新潟胆膵研究会

日 時 平成 15 年 9 月 20 日 (土)  
午後 2 時～  
会 場 朱鷺メッセ  
3F「中会議室 302」

## I. 一 般 演 題

## 1 経皮経肝胆囊ドレナージ後、経乳頭的胆囊ドレナージに移行した急性胆囊炎の 1 例

五十川 修・武井 伸一

厚生連刈羽郡総合病院内科

症例は老人性痴呆を有する 81 歳女性。嘔吐、腹痛を主訴に、平成 14 年 11 月 30 日初診。急性胆囊炎と診断され、同日 PTGBD を施行し入院。入院後は不穏が強く、チューブを抜こうとするため、両上肢の拘束を行った。チューブ造影では 3～4mm の小結石が数個認められ、胆囊摘出術の方針としたが、家族が難色を示したため、内視鏡的ドレナージへの移行を試みた。12 月 12 日、ERCP に引き続き、7Fr10cm の ERBD チューブを胆囊-十二指腸間に留置し、PTGBD チューブを抜去した。12 月 15 日退院し、その後、胆囊炎の再発はなかったが、平成 15 年 5 月 21 日自宅で就寝中に心肺停止となり永眠された。胆囊炎に対する経乳頭的ドレナージ術は一般的ではなく、チューブの長期留置例の報告もほとんどみられないが、本症例においては経過中、良好なドレナージが得られた。

## 2 経時的に観察しえた黄色肉芽腫性胆囊炎に伴う十二指腸隆起性病変の 1 例

高橋 澄雄・東海林俊之・早川 晃史

生天目信之\*・加藤 清\*・五十川正人\*\*

新潟こばり病院消化器内科

同 外科\*

信楽園病院内科\*\*

症例は 48 歳、男性。平成 14 年 12/29 より右季肋部痛、嘔気出現し当院受診、H2blocker、抗生剤、鎮痙剤など処方され症状消失した。平成 15 年 2/3 より同様の症状出現し、2/10 再診、白血球 12840/mm<sup>3</sup>、CRP 8.4mg/dl と炎症所見および腹部 CT にて胆囊結石、胆囊壁肥厚、胆囊周囲の脂肪 density 上昇認められ、胆石、胆囊炎の診断にて入院となった。絶食、抗生剤投与にて経過観察していたが、2/13 嘔吐出現。腹部 X-P では胃の拡張が認められ、2/15GTF では十二指腸球部に潰瘍をともなった隆起性病変を認め、そのため SDA 付近で狭窄していた。隆起からの生検は Group I であり経過や CT 所見から胆囊炎の炎症波及による炎症性腫瘍が最も疑われたが、胆囊癌の直接浸潤や十二指腸の粘膜下腫瘍も完全には否定できない所見と考えられた。しかし 2/17GTF では隆起は縮小し、SMT 様の隆起への変化がみられ、3/10 にはさらに縮小、白色調の Y-III ポリプ状隆起として認められた。また 2/26EUS では胆囊内に mass 認めず肥厚した胆囊と十二指腸が連続しているという所見であった。以上の経過から胆石、胆囊炎の十二指腸穿破と診断、3/13 開腹下胆囊摘出術施行した。術中所見では胆囊は十二指腸と癒着、摘出標本では RAS 内に xanthogranulomatous change が認められ、黄色肉芽腫性胆囊炎と診断された。黄色肉芽腫性胆囊炎に伴う十二指腸隆起性病変を経時的に観察し診断に有用であった症例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。